私立蓮城学園物語

ジュン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私立蓮城学園物語

【Ｎコード】
Ｎ４４４４Ｎ

【作者名】
ジュン

【あらすじ】
私立蓮城学園…
気が使える人間が多数いる学園で、主人公―黒鉄颯雲は何をしていくのか…。

オリジナルっぽいですけど、何か少し被るとこが有ると思います。
其処らは、寛大な精神で多目に見てくれると有難いです

第一戦〜プロローグ〜

私立蓮城学園――紅燦市市内にある全国的に有名な進学校である。

俺こと――黒鉄颯雲（くろがねそうううん）は、その有名な進学校という噂がある高校に幼馴染みと共に受験しに来ている。

「此処の噂は真実か否か…。否だとするならば、俺等全員不合格だな…」

この私立蓮城学園にはある噂がある。
その噂が『気が使える人間は無条件で合格となる』という内容だ。
気は恐らく武道の達人が使えるようになるアレだろう。
信じるのはアホのようだが、こんなのでも信じないと俺と幼馴染みの一人は合格出来ない。
所謂物凄い馬鹿なのだ。

「なー、ソウ。マジであの噂どうかな？マジじゃなかったら俺等中卒終了だぜ？嫌じゃね？」

「あぁ、それだけは回避したいなー」

この俺に話し掛けてる奴が幼馴染みの一人…浅井龍二といい、浅井長政の血を引いているらしい。
『らしい』というのは、正直興味がねぇから、アイツが家系図とか見せようとした時に、軽くあしらって見るのを止めたからだ。

「それは、颯くんも龍二くんも全然勉強しないからだよー」

「いや、零那。しゃあねーだろ？鍛練ばっかずっとやってたんだからさ？」

こっちはもう一人の幼馴染み――風魔零那だ。零那は風魔という忍集団の血筋を引いている女の子だ。

「零那ちゃんは、勉強出来るから俺等と違って合格確定だろうし、羨ましいなー。俺も勉強しとけば良かったよー」

そう言って龍二は嘆いてる。
ちなみに、零那は俺等と違ってかなり頭が良い。多分、この高校にも噂無しで入れるだろう。

（コイツ自分の事忘れてんだろ…）

「お前数学、割り算で『もう無理！』とか言って死んでたじゃねぇか……」

「あ！そういえば！」

コイツはどうやら、自分の事も分からなくなるくらいの阿呆らしい。
ちなみに、俺の方はただ単に勉強してないだけである。
して、どうなるかは分からないが……。

「あ！早くしないと試験始まっちゃうよ！早く行こ！」

「あぁ、分かった！」

零那が俺の手を掴み、引っ張っていく。

「ちょっ！？ソウ、零那ちゃん！俺を置いてかないでくれよー！」

その後を、龍二が嘆きながらも走って付いてきていた。

そして、試験会場に移動し…

「おぉ！見ろよソウ！俺等みたいな武道一辺倒の人間が割とたくさんいるぞ！」

入った試験会場には、スゴく頭が良さそうな連中と俺等みたいな武道に長けた人間が同じくらいの比率でいた。

「あぁ、あながち噂も嘘っぱちっていう訳じゃ無さそうだな。希望が持てたぜ」

とか、言ってる間に試験官？が来た。

「ハイハイ、さっさと席に着け。よーし、とりあえず最初に確認を取る。この中で、噂を信用して来たヤツ前に出てこい！」

（なんだ？もしかしたらアレですか？『なーに噂信じてんだよ、バーカ！』とか、言うつもりか？だとしたら、はっ倒すぞ試験官…）

とか、思いつつ三人とも前に進む。
出てきたヤツは意外とかなり多かった。
中には、どう考えてもコイツ武道やってねぇだろっていうヤツもいる。
多分ソイツラは『気』を優しさの方だと勘違いしたんだろう……。

「よし、集まったな！テメェラは今すぐ別試験会場に移動だ！学園長が直に見るそうだからな！」

（は？その学園長って強いのか？直に見るとか死ぬんじゃね？）

そんな事を思いつつも、試験会場に移動する。

「着いたな！テメェラ今すぐこの番号札を受けとれぇ！受けとれ無かったヤツは、即アウトだ！」

そう言って、無造作に番号札を投げる試験官。
俺も龍二も零那も無事に取る事が出来た。

「何番だった？俺『十番』だけど」

「龍二か。俺は『三番』なんだよねー。早くないか？零那はどうだった？」

「私は『八番』だったよ？」

なんか全員かなり早めだ。
まぁ、良いが…。

「じゃあ、颯くんが一番最初だね？頑張ってね颯くん！」

「あぁ、勿論だ。零那も龍二も健闘を祈る」

とか言ってると、お呼びだしがかかった。

「三番さっさと来いやボケ！」

（ったく、あの試験官口悪すぎんだろ…）

「うーっす。来ましたー」

「さっさと試験会場に入れカス！」

口が悪すぎる試験官にイライラしながらも、俺は試験会場へと入っていった。

「三番、黒鉄颯雲だ。力はアンタに見せれば良いのか？」

俺は真ん中にいた、異様な雰囲気を持った爺さんに聞く。

「勿論じゃ。どれ？力試しと行くぞい」

そう言って、爺が俺の前に来る。

（コイツ…。スゲーな。化け物のレベルに入る強さだろ…）

「では、行くぞ！」

爺は空気の壁を破るくらいのスピードで拳を放ってきた。
俺は、自らの気の力の一つ……「流見」という大気中と爺に流れる微弱な気の流れを読む能力を使い、爺の一撃を避け爺の動く方向に拳を向け、殴り付けた。
だが、爺はソレを体の軸を中心に回転する事でよけた。

「ほぅ…。ワシの一撃を避けるだけではなく、カウンターまでしてくるとはの…。今の力の使い方を聞かせて貰っても良いかの？」

「俺のは「流見」というヤツだ。体内、外気に流れる微弱な気を読む事で相手の動きを読んだり、異常を見極める力だな。まぁ、他にも肉体強化とか遠当て、武器強化に外的付与も出来るがな？」

気の使い方は人により個人差があるらしい。
その中でも代表的にあげられるのが『遠当て』『肉体強化』『武器強化』『外的付与』の四つだ。
『遠当て』は所謂かめ〇め波的ヤツやら、浸透勁等があげられる。見た目的に良いヤツの一つだ。ちなみに、コレは龍二の得意分野だ。
次に『肉体強化』。コレははっきりいって言葉通りだ。体内に気を循環させ、肉体強度を高めたりする。コレは、零那の得意分野。
次に『武器強化』だか、コレは武器性能を気を流す事で上げたり、気を武器の周辺に回す事で威力を上げたりする。
そして、最後に『外的付与』。簡単にいうとオーラみたいなモノだ。

「ほぉ…。レアな能力じゃの。ソレを見るのは二人目じゃ。良かろう。合格じゃ！編入クラスはＳクラス。制服はコレで、寮の部屋は３０１号室じゃ！鍵はコレだからの？」

そう言って、黒地のブレザーに赤いネクタイ、紺色のズボンと、鍵を渡してくる。

「準備はえぇな…。いつから、学校なんだ？」

「明日からじゃよ？」

耳を疑った。

（いやいやいや！ソレは流石に無いだろ！）

「マジで？」

「マジじゃ。とりあえず、今日は準備か何かで帰るのをオススメするぞ？」

「分かった…。では、失礼した」

そう言って、外に出ると零那と龍二が駆け寄ってきた。

「「どうだった！」」

「合格。Ｓクラスだってよ」

（それにしても、あの爺。なにを基準にクラス選んでんだ？）

「お！ソウ、スゲーじゃん！Ｓクラスってかなりつえー奴等が集まるクラスなんだってよ！」

（へぇ。初耳だな。能力補正付きでＳクラスか…。鍛練を怠らないようにしないとな…）

とか、考えてると次は零那の番となった。

「それじゃ、行ってくるね！」

「頑張れ零那！」

「零那ちゃんガンバ！」

そう言って、零那を見送り、十分後……。
零那が出てきた。

「零那どうだった？」

「どうだったの零那ちゃん！」

零那は制服を持っていたので、合格は確定だろう。
問題は、何処のクラスになるかだ。

「私もSクラスだったよ颯くん！」

そう言って、俺の手を握りぴょんぴょん跳ねる零那。

（なんか小動物的で可愛いな…）

「お！そうか。良かったな零那」

「零那ちゃんおめでとー！」

とか言ってる間にあっという間に龍二の番になった。
何故か知らんが、九番の男は精魂尽き果てた感じになってたみたいだった。

「俺もSクラスになって見せるぜ！」

「頑張れよ」

「頑張ってね！」

そう見送りをして十分後…。

龍二が満面の笑みで出てきた。

（あぁ、Ｓクラスか）

顔を見て分かったので、出迎えは無しにした。
零那も同様に顔で分かったのか、出迎えはしなかった。
すると……

「ヒデーよ！俺には『どうだった？』とか、声掛けてくんねーの！？」

「はいはい、どーだったー…コレで良いか？」

適当にやる気無い感じに聞いてやった。

「心配とかが全然こもってないよ、ソウ！俺なんか泣けて来ちゃうよ！？」

（泣けば良いんじゃね？俺は、困らんし）

とか、考えてる間に勝手に龍二が喋り出した。

「なんと俺もSクラスだぞ！ソウ！」

「はいはい、そうですかー」

やはり軽くあしらう。
すると、龍二は試験会場の隅で縮こまりいじけ始めた。

「チクソウ…。目から心の汗が流れ落ちそうだぜ…」

何か惨めに思えてきたので、龍二に救いの手を差し伸べる事にした。

「泣くな龍二。お前がSクラスだと言うことくらいハナから分かってたからよ」

その満面の笑みとかな？

「ソウ…。俺を其処まで信頼してくれていたのか。我が親友よ！」

勘違いして、俺に飛び付こうとしてくる龍二。

「ドラァァァ！」

「グペッ！？」

とりあえず、顔面を拳で殴り付けることにした。

「酷い！俺の顔がもっと酷くなっちまうよ！」

「心配するな。お前の顔にもうこれ以上悪くなる余地はない」

「え！？俺そんな救いようが無いくらいに惨めな顔してんの！？」

そう言って、俺の顔を見てきたので、目をそらしといた。
コレは、無言の肯定ととれなくもないな…。

「うわぁぁぁぁぁん！」

龍二はソレを肯定と取り、泣きながら走っていった。

「やり過ぎた？」

「流石にアレはやりすぎだよ、颯くん……」

この後俺と零那は、何とか龍二の機嫌を取り戻し、家へと帰っていった…。

第一戦～プロローグ～（後書き）

キャラの説明って要りますかね？

感想とか書いてもらえると有難いッス。

第二戦〜初日・上編〜

そして次の日…。
あの爺が意味分からん事言ってきたから今日から学校だ。

「今日からとか早すぎだろ…」

そう言いながら、俺は制服に腕を通す。

「ったく、相変わらず制服ってのは着づらくてイカンな」

そうぼやきながらも、着替えを終え飯やらなんやらを食い、ヘッドホンを着け登校を始める。

しばらく歩いてると、後ろから何か声が聞こえてきた。

「ソ……は……！」

（いや、ヘッドホン掛けてっから聞こえねぇし）

とりあえず、後ろに振り返ってみると龍二がいた。
本当にこのバカは一日で嫌な事は忘れるみたいだ。

「ソ…！お……う！」

（いや、いくら大声出してもヘッドホン掛けてっから聞こえねぇぞ？）

そう思いながらも、仕方無いのでヘッドホンを外すことにした。

「ソウ！おはよう！」

「しつけぇよ。ハッ倒すぞボケ」

さっきから何回も言うから、多少イラッとしたので言う。

「挨拶なしで暴力かよ！？其だけは勘弁してください！！」

「なら黙れやアホ」

一瞥しつつも、しっかり足を進めていく。

しばらくして、玄関付近で零那と合流した。

「おはよ、颯くん、龍二くん！今日も仲良しだね！」

「おはよ、零那ちゃん！そうだろ？」

「おはよう、零那。いや、何を言ってんだか。こんなアホと仲良いわけねぇだろ」

親指で龍二を指差しながら言った。

「しどい！俺とは遊びだったのか！？」

「気持ちわりぃんだよ、カス！テメェは地面と仲良くしてろや！」

そう言って、龍二の腹部に６割ぐらいの力で蹴りを食らわした。

「オボゥッ！？」

龍二は奇声を上げ、地面に突っ伏した。

「さて、行くとするか！」

「あ、うん。分かった！」

俺達は龍二を置き棄て、自らのクラス…Ｓクラスに移動を始めた。

「待ってくれよー！」

龍二は何故か一瞬で回復し、後ろから走って追い付いてきた。

「置いてくなんて酷すぎんだろ、ソウ！零那ちゃん！」

「うっせぇ、さっさと行くぞ」

そう言って、Ｓクラスに移動し扉を開ける。

「此処がＳクラスか。割と人が多いけど…」

多いんだけど…。
男少なくね？俺等合わして４人で女は零那合わして７人とか…。
アレか？武道界は男から女へと世代交代してくのか？

そんな事を考えながらも、俺は男二人の所に行く。

「よぅ。初めまして。俺は、黒鉄颯雲だ」

「初めましてなー！ワシは島津響夜やー！」

「俺は服部慶治だ。よろしくな」

島津響夜という男の方は、何か一言で言うとパイナップルみたいな髪型をしていた。
服部慶治の方は…白髪の天パだ。それ以外に言う言葉は無い。

「お前、パイナップルみたいな髪型してんな？」

敢えて触れてみる事にした。

「せやろー！ワシの頭案外食えるかも知れんでー！どや！おもれー

髪してんだろ？」

コイツウケ狙いでやってるのかよ…。

「そっちの天パはウケ狙いでやってるのかー？」

龍二がニヤニヤしながら、天パ君こと—慶治に言う。

「ちょっ！？おまっ！？それは！？」

言った瞬間、響夜が物凄い焦りを見せ…

「あ〝ぁ〟！ブチ殺すぞドカスが！血の華を咲かせて欲しいのかよ！」

天パの事を触れた瞬間、慶治が凄い形相でキレ始めた。

（天パに触れるのは止めよう…）

そう固く心に誓った俺だった。

一方その頃龍二は…

「すんませんっしたぁぁ！！」

全力で土下座していた。

「うわぁ…」

軽く引きつつも、末路を見ることにした。

「次頭の事に触れたら、テメェの脳髄引き摺り回して、グチョグチョにかき混ぜてやる…！」

何て恐ろしい事を言うんだ、コイツは！？
ヤバい！キレるとマジでこえぇ！

とか思ってると、先生？が来た。

「時間だー。さっさと座れー」

「席とか決まってんすかー？」

一応聞いておくことにした。

「適当に座っとけ。めんどくせぇ」

めんどくせぇってなんだよ。
お前本当に先生かよ？

「まぁ、良い。座るか」

と言いつつ、俺は左端の一番後ろに鞄を置いた。

「座ったなー？自己紹介すんぞ。俺は、比嘉絶耀（ひがぜつよう）だ。今年一年テメェラSクラスの担任になる。で、次はテメェラの挨拶だな？さっさとせぇや！」

と言うと、端から挨拶を始めた。

「織田紗理奈よ。一年間よろしく」

最初に自己紹介したのは、赤髪のポニーテールの女の子。

「明智美那です。一年間よろしくお願いします」

次に挨拶したのは、薄い黒髪のショートヘアーの女の子。

「浅井龍二でーす。よろしくー」

アホは紹介無しにする。

「ちょっ！？酷くないか！？」

地の文読むなボケ。

「風魔零那です。一年間よろしくお願いしますね」

零那も知ってるので、説明なし。

「上杉彩だ。よろしくー」

次に挨拶したのは、何か巫女とかがやりそうな髪の止め方をした黒髪の長髪の女の子。

「私は武田愛だ！よろしく！」

次に挨拶したのは、薄い紫色の髪のツインテールの女の子。

「島津響夜やー！よろしゅうなー！」

響夜も知ってるからスルーで。

「伊達美鈴だ。よろしく頼む」

次に挨拶した子は、濃い紫のロングヘアーで眼帯を着けてる女の子。

（目ぇ見えねぇのか？）

そんな事を思っていたら、次の子が挨拶を始めた。

「本多沙弥だ！よろしくな！」

次は、男っぽい茶髪のショートヘアーの女の子だった。

「服部慶治だ。よろしくな」

慶治も知ってるからスルーで。

「おーし、挨拶終わったな？この学園の説明するから、耳の穴かっぽじってよぉく聞けや。まずこの学校には、『闘技場制度』と言うのがある。簡単に言えば、学校内では教師が見てるなら戦闘してもオッケーってヤツだ。まぁ、教師が見てなくてもAとかB以下のヤツは勝手にすりゃあ良いがな」

適当すぎるだろお前。

「まぁ、たまにだがSに挑みに来るアホなAの奴らとかがいるがな…」

と言った瞬間扉が開いた。

「Sクラス黒鉄颯雲！Aクラス連坐硝煙が決闘を挑みに来たぁぁぁ！」

「な？」

「な？じゃねーよ！まぁ、良い。黒鉄颯雲。貴様の望み受けて立とう」

戦闘は嫌いじゃないし、とりあえず受けて立つことにした。

（この程度のヤツには気を使うまでもねぇな）

とか思ってたら、硝煙が蹴りを放ってきた。

（遅くないか？）

俺は、とりあえずその足を片手で掴み、回し蹴りを食らわした。

「グペェッ！？」

「……弱っ…」

硝煙は壁に飛ばされ、一撃で戦闘不能となった。

「うわっ…。Ａの奴らってこんなによえーのか？気ぃ使わなくても一撃とか…」

「普通は、気を使ってちょっと弱いくらいなんだがな…」

え？そうなの？
何かクソ弱かったけど？

「いや、コイツクソよえーじゃん」

「この男、ＳとＡの中間の強さだぞ？」

嘘だ？だって、こんなに弱かったじゃん？

「嘘だろ？バカみたいに遅かったぞ？」

「いや、ソウ。アレ割と速かったぜ？」

なに！？龍二まで割と速かったと言うだと！？
この中で、一番強そうなのは…。
アイツだな。

「なぁ、伊達さん。アイツの蹴りかなり遅かったよな？」

「確かに遅かったな。あの程度ならば、一撃でいけなくも無いだろう」

ほら、仲間いんじゃん。

「そうだよな？いやー、俺と同じ感想を持ったヤツがいてくれて良かったぜ！」

「お前らSクラスん中でも化け物みたいなヤツだな」

何て失礼な事を言うんだ、バカ教師。

「誰が化け物だよ。なぁ、伊達さん。コイツ失礼なヤツだと思わねぇか？」

「確かに、失礼な男だな」

伊達さん。アンタとは気が合いそうだよ。

「おい、俺一応教師だぞ」

「それがなんだ？」

一応、脅しを効かせ教師を見る。

「い、いや、何でもない」

屈するのが早いぞ、教師よ！

「と、とりあえずだ！今から一度、模擬戦を行うから今から鍛練場に向かうぞ！」

（へぇ…。鍛練か。良いね、今戦ってみたいヤツがいるんだよ…）

そう思いながら伊達さんを見ると、向こうも同じ事を思ったらしく、此方を見てきた。

（さて、模擬戦の相手を決めるとするか…）

俺は、伊達さんに話し掛けることにした。

「伊達さん。俺と模擬戦しないかい？」

「フッ…。私も丁度お前と戦ってみたかったところだ。良いだろう！受けて立つぞ！」

無事伊達さんとの模擬戦の約束を取り付け、俺達は鍛練場へと向かっていった…。

第三戦～初日、戦闘・中編～（前書き）

二編だけじゃ終わらなかったんで、三編に分けることにしました。
今回は颯雲ＶＳ伊達さんです。

第三戦〜初日、戦闘・中編〜

そして、鍛練場に着き…。

「中々な設備だな。壊れる事は無さそうだ」

鍛練場には、中々壊れなさそうな鉄でできたサンドバックにバカみたいにデカイ剣道場、何か良く分からん四角い部屋みたいなのがあった。

「ってか、何だよ？あの四角い部屋みたいなの？」

「あぁ、アレか。アレは重力値を変えられる部屋だな」

え？なにそのオーバーテクノロジー？
けど、修行にかなり使えそうだな……。

「上限値はどんなもんだ？」

「確かじ……学園長が５０Ｇとかほざ……言ってたぞ」

おい、教師。
お前、失言ばっかだな。うっかり、爺とかほざいてたとか言いそうになんなよ。
５０Ｇか…。今じゃあ、まだ出来ねぇレベルだな。

「まぁ、良い。今から模擬戦すっからさっさと相手見付けて、俺に報告しに来いや！」

（さて、行くとしますかね？）

そう思い、前に出ようとしたら、何故か囲まれた。

「えーと、響夜と織田さんと武田さんか。どうしたんだ？」

「「「私／ワシと戦ろう！」」」

なんだ？何でこんなに群がるんだ？
アレか？あの雑魚を一撃で倒したからか？
まぁ、もう決まってるから無理だが……。

「スマンな。俺はもう相手決まってるんだよ」

そう言って、前に出る。
伊達さんの方も同じくらいのタイミングで前に出てきた。
向こうは、龍二と零那と明智さんに捕まっていたみたいだが。

「決まったみたいだな？」

「あぁ、俺と伊達さんで模擬戦を行う」

（フフフ……。久し振りに血ぃ沸き、肉踊る戦いが出来そうだな）

そんな戦闘狂じみた事を考えてる間に、戦闘が組み終わったみたいだ。

まず、俺ＶＳ伊達さん。
龍二ＶＳ明智さん。
響夜ＶＳ上杉さん。
慶治ＶＳ本田さん。
零那ＶＳ武田さん。
で、また何か知らんが、俺ＶＳ織田さん。

……ちょい待て。
俺だけ何で二回なんだよ？

アレですか？新手のイジメですか？

「何で俺だけ二回なんだ？」

「は？別に良いだろ？」

教師テメェハッ倒すぞ。
いつかタコ殴りにしてやる…。

「ほら、三戦ずつ行うからな。黒鉄、伊達、浅井、明智、上杉、島津。出てきて、向かい合って並べ。ついでに言っておくが、武器の使用は有りだ。首を跳ねるとかじゃ無い限りどうしようと構わない」

「「「はい！／おう！」」」

とりあえず、後の事は考えず、暴れるとしよう。
ってか、武器有りって言っても、俺の武器…鉄甲しか無いんだけどな…。

「伊達さん。一つ聞きたいことがあるんだが、良いか？」

「なんだ？」

コレについては、聞かなきゃなんねぇだろ。

「眼帯をしてるのは見えないからか？…それとも、手加減のためか？」

昔に一度戦った事があったヤツにも眼帯してるやつがいたが、ソイツは『ハンデの為』と言ってたからな。

「勿論手加減の為だ。片目でやっても話にならんヤツばかりだったからな」

「そうか。ならば、その眼帯、取らせてやろう」

ハンデ有りでやられると癪に来るからな。

「フッ…。面白い。ならば、行くぞ！」

そう言って、何処から出したのか剣を出してくる。
しかも、その刀はかなり有名な刀……童子切安綱だった。

（え……？マジかよ？何で天下五剣の一つを持ってんだよ？）

そんな事を考えてる内に、伊達さんが目の前に来ていた。

「考え事とは随分余裕そうだな！」

俺は咄嗟に、肉体強化を使い、童子切安綱を片手でガードする。

「なっ！？」

「らあぁぁぁ！！」

片手でガードされた事に驚き、多少隙を見せた伊達さんに回し蹴りを放つ。
勿論、片手で童子切安綱は押さえたままだ。

「ちぃッ！？」

咄嗟にダメージを軽減するように体を逸らしていたが、やはり直撃は免れず伊達さんは壁の方に飛ばされていった。
しかし、伊達さんは飛ばされていく最中で体制を建て直し、壁に足を着け踏み込み、攻撃を仕掛けてきた。

「ハァァァァ！！」

「クッ…！」

俺は、伊達さんの攻撃を後ろにバク転して避けつつ、着いた手を軸に回転蹴りをする。

「チッ…！面妖な…！」

「褒め言葉と取っておくよ！」

そう言いながら体制を直し、三段蹴りを放つ。

「クッ…。早いな…！」

「まだまだまだぁぁぁぁ！！」

俺はそのまま変幻自在に流れるように連撃を繰り出す。

「クッ…！」

伊達さんは一度引き、ハンデとして付けていた眼帯を取る。

「此処からは全力で行くぞ！！」

「望むところだ！」

伊達さんがさっきまでのスピードよりも更に早く、切りかかってくる。

「クッ…！さっきよりも早い！」

俺は片手で受け止めるが、その瞬間伊達さんが俺に向かい蹴りを放ってきた。

「ガッ…！？」

咄嗟に体を捻り、避けようとしたが伊達さんの一撃はかなりの威力で、避けきれずモロに一撃をくらう。

「グッ…！肉体強化をしてもこの威力か…。参るね全く……血が疼くよ！」

俺は、外的付与と武器強化も使い伊達さんに突っ込む。

「らあぁぁぁ！！」

俺は蹴りを放つが、伊達さんはそれを避ける。
俺は咄嗟に放った蹴りの足下に気を集中させ足場を作り、そのまま
その足を軸とし蹴りを放つ。

「なっ！？」

伊達さんはそれを避けきれず、両手で其れをガードしようとするが、
外的付与に肉体強化に武器強化（足）の追加された一撃を防御仕切
れず、地面に叩き付けられる。

「ウッ！？」

「伊達さん。まだ何か隠しているね。出し惜しみせず、この一瞬に
全てを出し合おうじゃないか。俺も最早…出し惜しみはせん」

伊達さんにそう告げると、伊達さんは笑い出した。

「フッ…ハハハハハハ！！まさか隠しているのがバレるとは思わなかったよ！分かった。私も全身全霊で挑むとするよ。「五門」発動…！」

「ならば、俺も行くとしよう！」

俺は、流見を使い、伊達さんの体内の気の流れを読む。

（成る程。体内に大量の気を流れさせることで、人間の眠っている力を引き出す…か。素晴らしい力だな）

伊達さんが今までとは比べ物にならないスピードで攻撃を仕掛けてくるが、攻撃を全て読み避ける。

「面白い力だね。体内に大量の気を流れさせることで、眠ってる力を引き出し、爆発的な力を得る…か」

「お前もだ。その力はなんだ？」

フム…。戦ってる相手に力を聞くか…。まぁ、教えるとしよう。

「この力は「流見」と言ってね。空気中の微弱な気や、体内に流れる微弱な気を読むことで、敵の攻撃を読み切ったり、体の異常を見極めたりする力だよ」

「デタラメな力だな」

それは俺も自負しているさ。
それにしても、体内に気を流して、力を呼び起こす…か。
やってみる価値はあるな。

「俺も思うぜ。さて……行くぜ！！」

俺は、そのまま蹴りを入れるが、軽く避けられ蹴りをカウンターで放ってきた。
俺は流れを読み、その気の流れに合わせて、体を捻りかわす。

「さて、詰めと行くぜ！」

俺は、見よう見まねで体内に大量の気を循環させる。
失敗したら、危険な事になるのだが、流した失敗したら瞬間爆発的な力を感じたので、成功したのだろうと仮定した。
俺はそのまま回し蹴りを全力で放つ。

（さっきとは比べ物にならん速さだな…）

「なにッ…！？」

伊達さんは急に速くなった一撃に対応しきれず、地面に叩き付けられる。
俺はそのまま伊達さんの首筋に手刀を突き付ける。

「さて、俺の勝ちだね？伊達さん」

「……私の敗けだ…。最後の一撃…急に速くなったが何故だ？」

そりゃあ、急に速くなったら手加減されていたのかと思うだろうな。
伊達さん何か睨んでるし。

「なに…伊達さんの「五門」の力を真似ただけさ。まぁ、咄嗟だったから一瞬しか出来なかったがね」

「まさか一瞬見ただけで真似をしてくるとは…」

伊達さんは驚きで唖然としていた。

「伊達さん、立てるか？」

俺は伊達さんに手を差し伸べる。

「美鈴で良い」

「は？あ、あぁ。美鈴、よろしく。俺の事は、颯雲と呼んでくれ」

一瞬呆気にとられてしまったが持ち直し、言い返す。

「分かった颯雲。これからよろしく頼む」

「勿論だ。此方こそよろしく頼むぞ、美鈴」

「……あのしきたりを守らなければいけないか…。しかし、この男ならば良いかも知れぬな…」

美鈴が何かいっていたが、俺には聞こえなかった。
ふと回りを見ると、三戦とも終わっていた。

結果的に言うと、
俺ＶＳ美鈴＝俺の勝ち
龍二ＶＳ明智さん＝龍二の勝ち
響夜ＶＳ上杉さん＝上杉さんの勝ち

（おい、響夜。お前負けたのかよ…）

そう思いながら響夜を見ると、何故か上杉さんに頭をかじられていた。

「パイナップル～」

うん、上杉さんの目が怖いし、響夜の事をパイナップルと認識してる。
響夜…かじられてるけどお前…。

「まだ出荷前なんだ！！まだ甘くないんだぁぁぁぁ！！」

なにその言い訳……。

「あれ？そうなの？残念…、いつになったら食べられるの？」

なんて恐ろしい事を聞くんだろう、上杉さん……。

「うーん、きっとアレやわー。食い時になったら分かるんやない？」

適当な言い訳だけど、その言い訳だといつかお前食われるぞ？

「そうなのか！楽しみだー！」

（ほら。言わんこっちゃない）

響夜はこの言葉を聞き、ガチガチと震えていた。

「ほら、さっさと二戦目行くぞー」

そして、そのまま二戦目が始まりを告げようとしていた…。

第四戦～初日、戦闘・後編～（前書き）

颯雲ＶＳ織田さんと、寮での話です。

第四戦〜初日、戦闘・後編〜

「さて、次は織田さんか…」

そう思いながら織田さんを見ると、織田さんは口許を吊り上げ笑っていた。

（このクラス、戦闘狂率高くない？半分くらい戦闘狂って…。まぁ、俺も人の事は言えんのだが…）

そう考えてると、教師の声が聞こえてきた。

「さぁ、次のヤツ。黒鉄、風魔、織田、武田、本多、服部。出てこい」

（全く…俺には、クラスメイトの実力を見極める事は許されないのか…）

そう心の中で考えつつ、俺は織田さんに向き返る。

「黒鉄。お前が戦った後であろうとも、私は手加減などはせんぞ？」

「上等！これで織田さんが手加減しようものなら、俺は君に失望するところだ。…全力で来い！」

そう言った瞬間、織田さんが何処から出したのか刀を取り出す。
その刀も美鈴同様、見た事がある刀で、実休光忠だった。

（おいおい、マジかよ…。織田信長が所有してた刀とは……）

「なら、行くぞ！」

そう言った瞬間、武器強化を用いて強化した実休光忠を俺目掛けて振るってくる。

「しかし、甘いぞぉぉぉ！！」

そう言って肉体強化を使い、実休光忠を素手で受け止める。

「やはり受け止めるのか！しかし、甘いのはそちらだ！」

その瞬間、織田さんが外的付与を発動し、力が更に強くなる。

（チッ！？コレは…）

俺は咄嗟に織田さんの手元にサマーソルトを放ち、距離を取る。

「織田さん。やるね」

「ありがとう。じゃあ、こんなのは…どうかしら！」

そう言って、黒い気の弾を投げ付けてくる。
俺は流見を使い気の弾を避け、一気に距離を詰める。

「なっ！？けど！」

織田さんは気の弾を投げた事で、数秒の事後硬直があったが、直ぐに動き始めて切りつけてくる。
俺はそれを片手で往なし蹴りを放つが、織田さんは後ろに飛び退き回避した。

「まだまだまだぁぁぁ！！」

そのまま織田さんに縮地の要領で一気に距離を詰め、三段蹴りをし、更に追撃で本気で回転して踵落としを放つ。
織田さんは咄嗟に転がりなんとか避ける。
それと同時に、盛大な破砕音が鳴り響き、織田さんが先程までいた場所に、クレーターを作った。

「避けたか…」

「殺す気かぁ！？」

いや、仕合なのだから本気で行くのは当たり前だろ？

「だが、避けただろう？…それに、全力で戦らないと織田さんに失礼だろ？」

「確かにな…」

納得してくれた織田さんは、すぐさま攻撃を繰り出してきた。
織田さんの一撃は、真っ直ぐ横一文字に切り裂くようだったので、後ろにバク転をし、途中でバク転の動きを止め、腕を軸に回転し蹴りを放つ。
織田さんはそれを咄嗟に避け、言ってきた。

「奇っ怪な技を！」

そんなにおかしいかな？
前に一度、テレビで見た時に真似して覚えたんだけど。
あと、鉄〇でもなんかドレッドっぽい人がしてたぞ？

「さて、今から少し違った戦い方をしようじゃないか……」

そう言い、俺は織田さんに突っ込み、変幻自在に流れるように連撃を放つ。
止まることが無い延々と続く攻撃に織田さんは防戦一方となる。

「ほらほらほらぁぁ！！攻撃が来てねぇぞ！」

「クッ！？攻撃が出来ん！」

しかし、コレはかなり身体に負担を与える戦い方だな……。
戦い方を戻すか。

俺は織田さんに肉体強化、外的付与、遠当ての気を外側に纏わせ、
鋭い蹴りを放つ。

「なっ！？」

織田さんはなんとか、両手に外的付与を集中させ、ガード仕切ろうとするが、ガードしきれず、飛ばされた。
俺は、それと同時に縮地で距離を詰め、織田さんの体を掴み手刀を首筋に添える。

「俺の勝ちだ。織田さん」

「……負けたわ…」

織田さんは負けを認め、俯く。

「……けど、次こそは負けないわよ！」

どうやら、織田さんは負けず嫌いみたいだ。

「分かった。いつでも掛かってきな、織田さん？」

「勿論よ！それと、私の事は紗理奈と呼べば良いわ。貴方の事をほんの少しだけ認めたから」

ほんの少しだけ…ね。
まぁ、良いけど。

「分かった、紗理奈。俺は、颯雲とでも呼んでくれ」

と、挨拶を交わし周りを見ると、慶治が防戦一方となっていた。

「ほらほら、攻撃しないと勝てないよ！」

「チッ！」

本多さんも中々に強いみたいだ。
慶治の方は、防戦一方で手も足も出ない…と言う感じに見える。
……が、何処かしら女性相手だからという遠慮みたいなモノが感じられなくもなかった。
しかしこの後……、慶治の防戦一方の戦いが、本多さんのある言葉で崩される事となる。

「ほらほら、攻撃してみろよ天パ！」

プチンッ……。

そんな音が聞こえたかと思うと慶治が笑い出した。

「フハハハハハ！……言いたいことはそれだけか？……ならば……死ね！「怒髪点」発動」

そう言った瞬間、慶治の姿が目の前から消え去り、その一瞬後に本多さんが地に伏せ、その更に一瞬後に本多さんの首筋に刀を添える慶治の姿が現れる。

「ブッ殺してやろうと思ったが、流石に女は殺らん。だから……今回だけは許してやろう」

慶治はそう言い、本多さんの手を取り立たせる。

（アレ…龍二だったら今頃殺されてそうだな…）

そう思っていると、教師が話し始めた。

「終わったみたいだなー」

ちなみに結果でいうと…
俺ＶＳ紗理奈＝俺の勝ち
零那ＶＳ武田さん＝武田さんの勝ち
慶治ＶＳ本多さん＝慶治の勝ち

（零那負けたのか？武田さん一体どんだけ強いんだよ……）

「終わったし、今日はこれ迄だー。もう帰っても良いぜ？」

「はい？マジかよ…」

そんな感じで学校が終わり、俺は自らの寮へと足を進めた。

そして、寮へと着き……

「此処かー」

そう言って部屋を見てると、龍二が来た。

「ソウもこの部屋なのか？」

「あぁ、そうだ。お前もか？」

一応龍二に聞いておく。
正直違う方が面倒くさくなくて良いのだが……。

「勿論！ソウと同じ部屋かー！」

そう言って、バカみたいにはしゃいでるアホを視界に入れないようにしてると、向こう側から響夜と慶治が歩いてきた。

「なんだ？お前等も同室なのか？」

「そやでー。俺等も３０１号室やでー！」

「俺もだ…。さっさと風呂入りてぇ…」

慶治は汗をさっさと洗い流したいらしく、風呂に入りたいと、延々と呟いていた。

「まぁ、良い。じゃあさっさと風呂沸かすぞ…」

「ありがてぇ！颯雲、感謝するぜ！」

この後、俺は風呂の準備を行い、その後風呂に入った。

「あー、さっぱりしたぜ。ってか、お前らん中で料理出来るヤツいんのかよ？俺作れねぇぜ？」

「あー……。ワシも作れへんわー。颯に龍二はどうなんや？」

どうやら、二人とも作れんらしい。

「俺は勿論作れねぇぜ！」

そう言って威張るバカな龍二。

「マジかー…。颯はどうなんやー？」

「俺か？作れっけど？」

何だかんだで料理は得意だったりする。
実力は……直ぐに分かるだろう。

「マジで！？」

「あぁ、マジだよ。とりあえず、料理作るからちと待ってろや」

「「「おぅ！」」」

そうして、俺は料理を作り始めた。

そして、ちょうど夕飯の時間になった頃に料理を作り終え、料理を出す。
今回は、俺の気分と独断で和風な料理が並んでいる。
見た目からいうと、一体何処の懐石料理出す旅館だよ！？っていうくらいの素晴らしい見映えだ。

「「「おぉーー！！」」」

三人ともコレを見て、感嘆の声を上げていた。

「まぁ、良い。さっさと飯食うぞ。……いただきます」

「「「いただきます！」」」

そう言って、まず一口食べる三人。

「「「うまぁぁぁい！！」」」

「ッ！？うるさ……」

俺はあまりの大音量に耳を押さえた。

何故か、ダルそうにしていた慶治ですら目を見開き、叫んでいた。

「何や！？プロか！？プロやないんか！？」

「るせー…。得意なだけだよ…」

響夜の大音量に耳が痛くなりつつ答える。

「得意なだけでこんな上手いの作れるかぁぁぁぁ！！」

何故か慶治が叫んだ。

「どうしたんだよ慶治…。うるせーよ…」

「しかしコレを毎日食べられるんだから、役得すぎるな！」

「「ソレ同感！！」」

龍二が言った言葉の後に、二人が同意を示す。

「……けど、あわよくばこの料理を作ってくれるのが、女の子が良かった…」

「「ソレも同感……」」

そう言った瞬間二人は落ち込んだ。
まぁ、ずっと武道一辺倒だったんだし、其処らはしゃあねーだろうが。

「さっさと食え。そうせんと冷める…」

そう言ってると、扉が開く気配がした。

（飯時にどうしたんだ？…ソレに、チャイム鳴らさないのか？）

そう思いながら、玄関に行くと、本多さんがいた。
かなりげっそりして…。

「どうしたんですか、本多さん？」

「め、飯が食えないんだ…。上杉のヤツに殺される…」

（はい？良く意味が分からないんだが…）

「まぁ、良く意味が分からないんだが、部屋に案内してもらえないか？状況が把握できん」

「わ、分かった。着いてきてくれ…」

そう言う本田さんは僅かに震えていた。
部屋で一体何が…。

部屋に辿り着くと、其処には惨劇が広がっていた。
なんか良く分からない紫色の泡を立てている物体Xに、顔面蒼白で

倒れている上杉さんに美鈴。
所々暴れたかのような傷跡がついた部屋……。
何が起きたんだ？

「本田さん、これは一体…」

「上杉の料理の腕前が殺人的だったんだ…。それで、食った上杉と伊達のヤツが……食った瞬間に、断末魔の叫び声をだして崩れ散ったんだ…」

なんて恐ろしい料理なんだ…。
怖すぎる…。
殺人兵器を料理という過程で生み出すとは…。

そう思ってると、美鈴がピクリと動いた。

「美鈴。生きているか？」

「な、なんとかな……」

伊達さんはまだ顔面蒼白だったが、なんとか喋る。

「はっ！？さっきまで花畑にいたのに！？」

上杉さんが起きると同時に、そう口にする。

（鍛えられた武人を死地へと誘うとは……恐るべし！上杉さんの料理！）

なんか三人とも、色々と可哀想だったので、助けることにした。

「どうだ？こっちで飯食うか？」

「「「良いのか！？」」」

そりゃ、こんな惨劇が広がってるのに助けないのは、人としてどうなのか？と思うワケなんだよ。

「勿論だ。ただし、少しだけ時間がかかるが良いか？」

「勿論良いに決まってる！」

そうして俺達は部屋に戻り、すぐさまに俺は料理を作りにかかる。

そうして少し経ち、料理を作り終えたので女性三人に振る舞う。

「口に合えば良いのだが…。召し上がれ」

「「「いただきます！！」」」

俺も飯を食い終わってないので、飯を食べることにした。

「う、うまぁぁい！！」

上杉さんが叫ぶ。
お前は、慶治と同じ反応をするのか？
まぁ、良いが……。

「せやろ！颯の料理かなり美味しいよな？」

「美味い！美味すぎる！」

美味すぎるってなんだよ…。

「武道も出来て、料理も出来るなんてどれだけ器用なんだ、颯雲」

「いや、美鈴も頑張れば出来る事だよ？どうだ？この際、料理でも覚えてみるのはどうだ？」

このままじゃ、毎日臨死体験する事になるしな？

「それも良いかもしれんな…」

そうこう言ってる間に飯を食い終わる。

「じゃあ、今度教えてやるよ。ってか、明日はどうするんだ？」

「明日……も、飯を食わしてくれないか？」

美鈴がそう聞いてくるが、正直答えは決まっている。

「勿論良いに決まってるさ。全然飯食いに来てくれて構わねぇぜ」

「ありがとう、颯雲！恩に切る！」

「気にするなよ。俺が勝手にしたいだけだからな」

そんな感じで、初日は終わったのだった…。

第五戦～次の日～（前書き）

今回は短めです。
学園祭のせいで、更新が……。

第五戦～次の日～

次の日…。
俺達は7人で飯を食い、学校に来たワケなんだが……。

「おかしい……」

「何がやー？」

響夜は疑問そうに聞いてくるが、どう見てもおかしい…。
何故かは知らんが、俺の机が前側に移動していた。

「席が……変わってる……」

「なんや？そんなことかー。ええやん、減るもんや無いやろ？」

確かに『そんなこと』何だろうが、どうしても誰が席を変えたのか気になった。

「誰が席変えたんだ？」

そう言って、クラスに既に着いていた零那、紗理奈、明智さん、武田さんに聞く。

「あ、颯くん。それなら、私と紗理奈ちゃんの二人でやったよ？」

零那が平然と答える。
これが当たり前なのか？

「そうか。まぁ、良いか。気にするまでも無いし…」

因みに今の席は、右横に零那、左横に紗理奈、前に美鈴、右前に龍二、左前に武田さん……という感じだ。

（なんか囲まれてる？……まぁ、良いか…）

気にするまでも無いとか、思っていると、教師が入ってきた。

「座れー。ホームルーム始めんぞー」

見るからにダルそうな顔をしながら言ってくる教師。

（コイツ絶対教師じゃねぇだろ……）

少し経ったが、まだ全員座りきってなかった為、教師がキレた。

「座れっつってんのが分かんねぇのかぁぁ！！浅井ぃぃ！！さっさと席着けや！日本海に沈めるぞ、このクソゴミが！！」

主に、まだ座りきって無かった龍二にどこぞのヤクザ的な言葉を浴びせる教師。
お前……ぜってぇ教師じゃねぇだろ……

「はいぃぃ！！分かりましたぁぁぁ！！」

龍二はそう言い、コンマ二秒で席に着いた。

「やっと着きやがったか……。今日は学校の事を詳しく言うぞ？爺……学園長に言えって言われたしな…」

遂にそのまま言いやがった！？

「とりあえず学園内の強者の上から十人……序列十番以内のヤツは『十連星』と呼ばれている。メンバーはこんな感じだ」

そう言って、何処から出したのか表を持ち出す。

一番　玄罪（げんざい）　刃羅（じんら）　3―S所属
二番　獅堂（しどう）　零次　2―S所属
三番　獅堂（しどう）　翔次　2―S所属
四番　天海（あまみ）　恭子　2―S所属
五番　諱（いみな）　圭護　3―D所属
六番　斬義（ざんぎ）　絶　2―S所属
七番　煉夜（れんや）　燼　3―S所属
八番　焔叉（えんさ）　斑（まだら）　3―S所属
九番　桐谷（とうや）　真子（まこ）　2―S所属
十番　十六夜（いざよい）　零刃（れいじん）　3―S所属

と、こんな感じだった。

（ってか、Dクラスで序列五番のヤツがいるんだが？Dクラスは気を使えない頭が良いヤツが集まるんじゃ無いのか？）

「五番にDクラスのヤツがいるんだが、何故だ？気が使えないんじゃ無かったのか？」

「確かにこの諱圭護は気が使えなかった。…入学当初はな？しかし、現在は気を使うことが出来ている」

めざましい努力をしたんだろうな……。

「努力ゆえに……ってことか…」

「そういうことだ。特異的に、零番が二人存在するが……登校が自由化されているし、来ないだろう…。だから、言わないでおくぞ」

（登校が自由化されているとは一体どんなヤツラなんだ？）

「次に気の話をするぞ？」

気の話……。
力の使い方の事か？

「気の使い方には、個人にあったモノが有るのは知っているな？一般的には、肉体強化、遠当て、武器強化、外的付与が一般的だが、特異的にオマエラの流見や五門、怒髪点とかがある。他にも、違う能力を使うヤツもSクラスにはいるがな？……それと、コレは特異中の特異だが、『変換者（コンバーター）』と呼ばれるヤツがいる。ソイツラの力は、気を違うエネルギーに変えることだ」

『変換者（コンバーター）』ね……。
いるのか？見たことねぇが、かなり強そうだし戦って見てぇな。

「そのコンバーターとやらはいるのか？」

「今は、学園内にはいない。過去に一度だけいたらしいがな？」

なんだよ。
いねぇのかよ…。残念だ。

「で、話は変えるが、明日から新入生旅行だ。準備とかちゃんとしろよ？」

え？聞いてねぇんだが？
何だソレは？

「聞いてねぇんだが？」

「だって言ってねぇし。知ってたら、かなりビックリだぜ？」

死に曝せ、このアホ教師が……。
血祭りにあげてやろうか…。

「新入生旅行では、戦闘とかするからな？一年の中でも、強いヤツを今年の武道大会の代表として出場させるからな」

へぇ……。
良いね。そんなヤツが有るんだ？

「じゃあ、今日は解散！さっさと帰って準備しろよ？」

毎回早いねー。
とか思いつつも、俺は準備の為に寮へと帰るのだった……。

第六戦～新入生旅行その壱～（前書き）

龍二を間違えて書いてたので、再度投稿しました。

第六戦～新入生旅行その壱～

さて、今日はいきなり告げられた新入生旅行の日だ。

俺達はバッグを持ち、集まって教師を待っている。

（全く毎回おせぇヤツだな。やる気無さすぎだろ）

「先生遅いね、颯くん？」

「あのバカが遅れるのは二日で分かったが、いつもの事だ」

あのバカは、ここ二日間毎日遅れていやがるからな。

今日もさぞかし大遅刻してくる事だろう。

「ほぉ、誰がバカだって？」

「うおっ！？」

俺は飛び退き、後ろを見る。
其処には、異様な張りきりを表すような格好をした教師が。

「今年の旅行は……伊豆だぁぁぁぁ！！」

天に指を指し、叫ぶ教師。
因みに、教師は既にもう浴衣に着替えている。

（……バカだろ？）

「温泉ヤッベェ！温泉ヤッベェよ！マジテンション上がるわ！フハハハハ！！」

そう言って狂い出す教師。
あぁ……もうコイツダメだ…。

「今なら飛べる気がするぞ！」

「なら、飛び込め。崖から飛び降りろ」

イライラしながら、教師に告げる。

「すんませんっしたぁぁぁ！！」

そう言って、土下座する教師。

「ったく、いつもはマトモにやりやがらねぇのによ…」

「ソレはアレじゃん？環境的な問題じゃね？」

悪振りもせずに、アホな事をいう教師。

「バカだろ、テメェ」

「失敬な！バカではないぞ！なぁ、浅井！」

教師は龍二に目を向けるが、逸らされる。
次は、零那に……逸らされる。
その次は、紗理奈に……逸らされる。
と、繰り返していき、全員に逸らされたら辺で叫ぶ。

「俺はバカだったのかぁぁぁぁ！？」

「当たりだ。ってか、さっさと行くぞ？」

もうこのバカと話すのは疲れてきたので、話を逸らすことにした。

「あ、あぁ…。そうだな…。テメェラァァ！！バスに乗れぇぇ！」

ウザいぐらいにテンションが高い教師をよそに、俺達は着々と席に着いていく。

「伊豆に出発ぅぅぅ！！」

（マジテンション高過ぎてうぜぇな…。ハッ倒して良いかね？）

とか、思いつつ数分後…。

「ヤバい…。吐きそう……」

さっきまでのテンションとは裏腹に、窓際で顔を青くする教師を見て俺は呆れがマックスに上がった。

「……はぁ……」

「何溜め息吐いとるんやー？」

「溜め息吐いてたら、幸運逃すぜ？」

響夜が笑いながら聞いてくる。龍二は……なんだろうな？

「あのバカ教師に呆れてな…」

「そりゃしゃあねぇだろ。アレはいつもアレなんだからよ」

慶治は既にあのバカの存在を諦めてるみたいだ。

「それより、少しゲームでもしようぜ？」

「まぁ、良いぞ？」

龍二の提案を飲む。

すると…

「なになに、慶治。ゲームすんの？」

「沙弥か。あぁ、なんか知らんがするみてぇだぞ？お前もやるか？」

いつの間にか本田さんと慶治は仲良くなっていたみたいだ。

「勿論！良いよな、颯雲？」

「あぁ、良いぞ」

ってか、何故俺に聞くんだよ？

そう思ってると、上杉さんが響夜と話してた。

「何だー？遊ぶのか？私もやるぞー！」

「おぅ！全然えぇと思うでー！」

二人増えたなら、もう全員にすりゃ良いんじゃね？って事で、話しかけていくことにした。

「零那。ゲームするか？」

「良いの？」

当たり前だろ？その為に誘ってるワケだし。

「勿論！」

さて、次は……。
俺は、美鈴、武田さんに話しかける。

「美鈴、武田さん。二人もゲームどうかな？」

「あぁ、良いぞ」

「私も良いわよ。それと颯雲くん。私の事は愛で良いわよ」

愛か？……まぁ、良いか。

「分かった。よろしく愛」

そう言い、次は紗理奈に話し掛ける。

「紗理奈。紗理奈もゲームどうだ？」

「まぁ、良いわよ？」

紗理奈も軽く同意する。
明智さんは龍二が誘ったみたいだ。
……さて、ゲームを始めるか。

「で、何すんだ？」

「さぁ？無難にポーカーかな？」

龍二はあまり考えてなかったようで、曖昧に答える。

「ならせっかくやし、罰ゲーム付けよーや！」

その響夜の提案に同意する１－Ｓメンバー。
罰ゲーム内容は、クジで決めるみたいだ。

（罰ゲームくらってたまるかよ！）

一回目は真剣に、イカサマ無しで行くことにした。
結果……負けた。

「やられたぁぁ！！」

確実に分かる事を言おう。
龍二に慶治はイカサマをしていたと…。
勿論俺を負かすためのイカサマを……。
なんて小癪な…。

「罰ゲームだな、ソウ」

「そうだな。罰ゲームだ、颯雲」

二人は黒い笑いを浮かべ言う。
次は絶対負かしてやる…。

「クッ…。仕方無い。引くぞ…」

そう言い、クジを引き内容を見る。

『醤油一升瓶一気飲み』

（死ぬわぁぁぁぁぁぁ！！）

殺人の意思しか感じれない罰ゲームを見ながら思う。

「一升瓶かー。はいコレ」

そう言って、一升瓶を渡してくる。

……血も涙もねぇな。

（覚悟決めて飲むか…。とりあえず、肉体強化はしよう）

肉体強化をし、一気で一升瓶を飲む。

「……死ねる…」

「大丈夫か、颯雲？」

美鈴が背中を擦ってくれた。
心遣い痛み入るよ…。

「ありがとう、美鈴。もう大丈夫だよ…」

覚えていやがれ…。
罰ゲームをさせてやるぞ、龍二、慶治！

そして、第二戦…。
俺はイカサマを使うことにした。
そして、1ターン目で…。

「コール！」

俺の手札はイカサマによりフルハウスになっている。

「「なっ！？」」

龍二に慶治は有り得ないと、目を丸くしていた。

そして、この二戦目は慶治の敗けとなった。

「罰ゲームだな？慶治？」

「クッ…！」

そう言いつつも、慶治は罰ゲームを引く。
罰ゲームの内容は…

『少し前に話していた異性の頬にキス』だった。
慶治は、今回は本多さんにしか話していない為、本多さんの頬にキスすることとなった。

「クッ…！俺が罰ゲームにかかるとは…。沙弥。嫌かも知らんが、我慢してくれ」

そう言い、本多さんの頬にキスする慶治。
本多さんも嫌そうではないので、満更でも無いみたいだ。

「さて、次に行くぞ！」

「ってか、マシなのねぇのか？」

一升瓶は殺意が見えるし、キスは煩悩が見える。

「無しも有るんだぞ？」

そうなのか。なら、幾分かマシだな。

そして、三ゲームが開始される。
勿論イカサマはしている。そして、四順目が過ぎた頃に勝負をかける。

「コールだ」

「なっ！？」

龍二が驚いた声を上げた。
イカサマに自信が有ったんだな？

そして、結果的には……美鈴が最下位になってしまった。

（し、しまった！？）

「最下位になってしまったか…。仕方無い…潔く罰ゲームを受けるとしよう」

（無し来い！無し来い！無し来い！）

と、願いを込めていたのだが、思いも虚しく……

『今一番気になる異性の頬にキス』

キス好きだなオイィィ！？
そう内心で叫んでいると、頬にキスをされた。
……はい？

「罰ゲームだからな！」

そう言う美鈴の顔は少し朱を帯びていた。

「へ？あ、あぁ。分かった」

正直未だに頭がパニック状態なワケだ。
気になる異性……。

マジか…？

そんな事を考えている間に、目的地に着いたようだった……。

第七戦～新入生旅行その弐～（前書き）

新入生旅行編その弐です。
戦闘は少な目です。

第七戦～新入生旅行その弐～

伊豆に着いたわけだが、俺はまだ理解があまり出来ていなかった。
しかし、こんな悩みながら新入生旅行を過ごすのは、余りにも寂しすぎるので、この考えを今はしまっておく事にした。
そして、回りを見渡すのだが…。

「なんだ、此処は……」

俺から出た第一声…。
其処は伊豆というよりも樹海と言った方が相違無く、本当に旅館が有るのかとさえ疑問になるような場所だった。

「ココ……ホンマに伊豆なんか？」

「あぁ！此処は伊豆の中でも秘境中の秘境。一般人には、あまりにも厳しい環境で来ることが難しい場所だ！ちゃんと旅館だってあるぞ？」

そう言って、教師は笑っていた。

（どんな旅館なんだか……）

そう思いながら、俺達は旅館へと移動した……。

「「「おぉーー！」」」

俺達から感嘆の声が洩れたが、ソレも仕方がないだろう。
其処には、この樹海には似つかわしくないくらいの豪華で巨大な旅館が聳え立っていたのだから。

「どうだ！ココスゲーだろ！」

「確かにな……。まさかこれ程までとは思っていなかった……」

その言葉に、同意を示す１－Ｓメンバー。

「とりあえず入るぞ！爺の話が有るんだからな！」

完全に言い直す気すら無くなっている教師。
マジコイツダメだわ……。

そう思いながら中に入る。
中も外の外見に相応しいまでに豪華絢爛といったところだった。

（こんな施設を此処に作って儲かるのか？）

そう考えていると、爺が話を始めた。

「さて、新入生諸君！この旅行の目的についてだが、それは一因として親睦の為と、また一因としてこの学年の代表を選出するためでもある！！旅行は元来楽しむモノであるが、力無き弱者は楽しむ事は出来んかもしれん！しかし！！我が学園は、武道極道を目指すモノだ！勿論、文武両極道が最も素晴らしい！！だから、Dクラスの諸君！この旅行を通じて、力を強めていって欲しい！そして、文武両極道を目指して欲しい！Sクラス諸君は、更に自らの力に過信せず！更なる高みを目指して欲しい！！コレにて儂の話を終える！次は、今から行う行事についてだ！絶耀！説明を頼む！」

「ウィーッス……」

ダルそうな顔をしながら、話を始めようとする教師。
説明くらい真面目にしろよ……。

「あー、今から行う行事について話すぞー。まずこの球が分かるか？」

そう言って、深い青色の球を出す。
コレがどうしたんだ？

「お前らには今から投げるこの球を探してもらう。勿論球はあの樹海に投げるワケなんだが、コレを取れなかったバカは、晩飯無しだ」

「「「「「えぇぇー！！」」」」」

そう教師が言った瞬間、生徒達が激しくブーイングをする。

「黙って聞きやがれこのクソカスがァ！！」

それに、早速キレる教師。
キレやすすぎだろ……。

「ちなみに、Dクラスは今から鍛練だァ！！少しでも強くなって見せろォ！！」

「「「「「えぇぇー！！」」」」」

Dクラスの面々もブーイングをする。
そりゃそうだろ…。
修行とかした事無いヤツばっかだろうからな。

「オラァ！！早くSクラス、Aクラス、Bクラス、Cクラスは外に出ろォ！！」

（もう開始なのかよ…。早くないか？）

そう思いながら外に出る。

「さて……準備運動でもするとしますか…」

そう言いつつ軽く体を動かす。
そして、その五分後……。

「今から開始するぞぉ！制限時間は晩飯までのおよそ三時間！！その間にこの球を一つでも手に入れろォ！！……オラァァァァ！！」

球を見せたすぐ後に、教師は全力で球を一掴みに投げた。
俺は、直ぐに飛んだ先を確認し、記憶する。

（ってかアイツなんだよ……。気で強化もしねぇで、数十キロ飛ばしたぞ……）

「さて、開始だァァ！！」

開始の合図が鳴り、Ａクラス、Ｂクラス、Ｃクラスの面々が我先に飛び出す。

「全く世話しないやっちゃなぁ」

「そうだな響夜。ま、俺等も飯食いてぇし、行くとしますかね？」

「そうだな。まぁ、ルールとか言ってなかったし、何でもアリなんだろ？いざとなりゃ、持ってる男タコ殴りにして取りゃ良いか」

慶治はそんな鬼畜的所業を言いながら黒い笑いをする。

「まぁ、ＡＢＣの３クラスはかなりおせぇのばっかだから余裕だろ？」

「確かに見た限りの大体はかなり遅かったからな」

美鈴が同意を示す。
本当に気が合うなー。

「っと、そろそろ行くかな。じゃあなー」

「じゃあね、颯くん！」

「おぅ！じゃあな零那！」

俺は肉体強化を足のみに集中させ、一気に飛ぶ。

「ハハハハハ！！」

ただ一歩の踏み込みのみで、一気にＡＢＣの連中を置き去りにする。
そして、教師が投げた地点まで移動する。

「さて、此処等かね？」

そう言い、球を探しだす。

「コレか…。割と早く見付かったな。何個か予備として持っておくとするか…。暇だしな」

球の一個を早々に見つけてしまったので、何かあったときの予備用に球を持っておく事にした。

「確か…固まってたのは、彼方の方角だったな…」

俺は、然程距離が離れてないので、気を使わずに身体能力だけで走る。

……コレでも気を全力で使ったBクラス並みに早いのだから驚きだ。

「確かここら辺だったかね？……っと、あったあった」

そう言い、三つ固まっていた球を取りポケットの中に入れる。

「……暇だな…。あと二時間くらいどうしよ…」

そう呟いていると、後ろから気配がした。

「球を渡せぇぇぇ！！」

「ウッセェ。黙れ」

そう言って、背後のヤツに蹴りを入れる。

「グァァァ！？」

「……弱っ…」

後ろから襲い掛かってきたソイツは、只の一撃で気絶し倒れた。

（……手応えがない…）

俺はポケットから携帯を取り出す。
何で持ってるか？だって？
俺も現代人なんだ。それくらいは持ってるさ。
勿論Ｓクラスの奴らも全員持ってるぞ？

プルルル……ガチャッ！

『もしもし俺だが』

「おい教師。この森に危険生物みたいなのはいるか？」

あまりにも手応えがないので、森の中の生物をボコることにした。

『あー。いるぞ？バカみてぇにデケェ熊の主が』

「オッケー。じゃあな」

そう言って、一方的に電話を切る。

（主か…。面白そうだねぇ）

そう思いながら、主の探索を始める。

それから探す事一時間……。

主を発見した。

「グガアァァァァァァァ！！！」

主のサイズはおよそ四メートル。

見た目は、熊というよりも、一般人から見たら怪物そのものだろう。

「さーて、少し相手してもらうぜぇ？」

「グガアァァァァァァ！！！」

主熊は叫びながら俺に向かい手を当てに来た。

「Aクラスの奴等より断然はえぇな！」

俺はそう言いながら避ける。

「威力たけぇな…」

先程まで俺がいたところには、巨大なクレーターが出来ていた。

「食らえ！！」

俺は主熊の頚を刈るように回し蹴りをする。

「ガッ…グガアァアァァアァアァ！！」

「なっ！？」

主熊は俺の足を掴み、地面に叩き付けようと振りかぶる。

「チイッ！？」

俺は掴まれた足を軸に数回転し、僅かに隙間が空いたところで足を抜き、手を蹴り上に飛ぶ。
俺はそのまま回転し、主熊に向けて踵落としを放つ。

「グガァアァァアァァ！！！」

「打たれ強いか…。なら、一気に畳み掛けるのみ！！」

踵落としを食らったはずの主熊は、少しぐらついたものの態勢を建て直し、噛み付いて来ようとする。

「ラァァァァ！！」

「グガッ！？」

俺は気を使わないままで主熊の歯を全力で殴り、叩き折る。

「オラァァッ！！」

俺は殴って直ぐに後ろ蹴りを主熊の腹に蹴り込む。

「ガ…グ…ガアァァアァァアァァァ！！！」

主熊は蹴りにより飛ばされ、後ろにあった岩にぶつかる。

「グゥゥゥッッ！？」

その衝撃もあり、主熊は倒れた。

「……戻りにかかるか……」

そう言い、俺は帰るために歩き始めた……。

そしてその最中、焦り探している女の子達を見掛けた。

「どうした？」

俺は、見捨てるワケにもいかないので声を掛ける事にした。

「た、球が…見付からなくて……」

「ど、どうしよう！」

「助けて！」

そう口々に喋る。

（三人か……。確か俺四つ持ってたよな？まぁ、やってもアイツラは持ってるだろうし大丈夫だろ）

「球なら俺がやるよ」

「「「本当（ですか）！？」」」

三人とも希望に満ちた顔で俺を見てくる。

「ほら。どうぞ」

「「「ありがとう（ございます）！！」」」

そう言って、三人は頭を下げる。

「良いって良いって。じゃあな？」

「あ、あの…お名前は？」

女の子の一人がなんかもじもじしながら聞いてきた。

「あ？俺は、黒鉄颯雲だ。じゃあな」

俺はそう言って、戻っていった…。

第七戦～新入生旅行その弐～（後書き）

次の次くらいで多分戦闘すると思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4444n/

私立蓮城学園物語

2010年11月3日13時55分発行